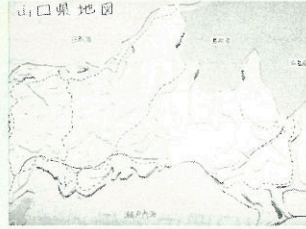




出口 佳奈
(3年)



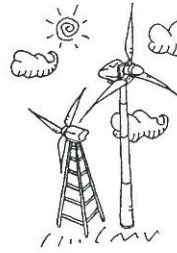
松永紀世彦
(4年)



「きちょうへ
ようこそ！」

⑤

岡本博之さん
(小野地)



「住みがいい」のある町、日置町

日置町に帰って来て、早いものでもう二年半が経つ。帰る前の七年間は萩市に住んでおり、子供達にとつても馴れ親しんだ地であったようので、「日置に帰る」と話した時には、「友達がいない。転校はイヤ。店が無い」などと抵抗されたのを思い出す。三人の子供達は、今では高一、中二、小六となり、日置で友達もでき、萩の事は忘れたようだ。

日置に帰るについて、実は私自身も少し悩んだ。仕事柄転勤が多くこれまで転居を繰り返してきたが、今後は子供達が進学時期を迎えるため転居は難しくなる。一方で、日置近辺に高校が多いとはいえず、進路の選択や通学に苦労するのは、とも思う。しかし、何より決め手となったことは、日置に住む父母が元氣なうちに子供達と一緒に暮らしたいと思ったことだ。子供達に、稲を育て、スイカを作る「日置の実家」を味わって欲しいし、覚えておいて欲しい。



日置に住んで感じることは、日置町は「住みがいい」のある町——ということだ。町の規模が小さいということもあるが、町や地域の行事に自分が参加しているという気持ちになるし、そこに参加している人たちの顔がしつかりと見える。みんなが、地域の一員として、「他人が」ではなく「自分」の気持ちを持って持っているからか、と思う。

心配もある。子供達は、この住みがいいのある日置町に住み続けることができるだろうか。近隣に若者の就職の場を確保することを望みたい。「住みがいいのある、住み続けられる日置町」とするために。

筆者紹介

平成7年に萩市から転入。ご家族は、妻、子供さん3人、父、母、祖母の8人暮らし。現在、山口県長門土木建築事務所勤務。

★ へきちょうへ ようこそ！
★ 登壇者募集中

日置俳壇

〈兼題 秋分〉

- 秋分や潮騒聞こゆ里の墓地 宮本やすの
- 秋分や自愛一途に独り住む 白石 敏江
- 秋分や空と海とが同じ色 木村 一路
- 秋分の墓地になつかし友の顔 宮本やすの
- 秋分やわが長き影踏みもどる 西村亥子代
- 秋分の日の晴れ祈る老仲間 国司ハル子
- 秋分を無事故に勤めもどり来ぬ 松岡ヨシ子
- 秋分を今年も無事に過しけり 塩瀬 米江

〈雑詠〉

- ゆるやかに流れる雲も秋の色 塩瀬 米江
- ダムからも余りて落ちる秋の水 木村 一路
- 大いなる屋根去り難き去ぬ燕 木村 一路
- 出不精の老の言い訳け秋暑し 白石 敏江
- 空缶を蹴つて浪人夏瘦せず 富田佳津美
- キャンプして見え遅しく 西村亥子代
- 五年生 おだやかな夕べ迎えり防災日 宮本やすの
- 夏ばてを未だ引きずる老の秋 国司ハル子